

「日本音楽学会国際研究奨励金」受領者報告書

三城桜子 (マンチェスター大学)

(1) 「発表学会について」

学会の名称：

国際音楽学会 第2回東アジア地域会 (2nd Biennial Conference of the East Asian Regional Association of the International Musicological Society)

期日・場所：

2013年10月18日～20日、国立台湾大学 National Taiwan University

私が発表の機会をいただいた学会は、国際音楽学会 (IMS) 東アジア地域会の第2回大会である (第1回目は東アジア地域会が設立された2011年にソウルで開催)。今回は 'Musics in the shifting global order' という学会テーマのもと、台北の国立台湾大学で行われた。参加者の大多数は近隣アジア諸国からであったが、国際音楽学会の会長、理事をはじめ、東アジアの大学で教鞭をとっている欧米出身の研究者など、欧米、オーストラリアからの参加者もみられた。次回、第3回大会は2015年に香港で開催予定である。

たとえば国際19世紀音楽学会 (Biennial International Conference on Nineteenth-Century Music) や国際バロック音楽学会 (Biennial International Conference on Baroque Music) などの対象時代の限定された学会に対して、国際音楽学会の地域会は、ひとつの大きな学会テーマのもとに多様な時代・トピックにわたるセッションが存在し、参加者の専門が幅広い時代、領域にわたる。同じようなテーマに取り組んでいる近隣諸国の大学院生や研究者との学術交流の場として、また自分の専門以外の時代・領域に関する英語発表に触れる機会として貴重であろう。

学会の様子は、台湾の経済部国際貿易局の MICE 産業プロジェクト ('MEET TAIWAN') が以下の Youtube サイトで公開している短いビデオクリップでも見ることができる。

<http://www.youtube.com/watch?v=XvHLNc-SnUU>

(2) 「研究発表」

発表セッションの名称 : Theory Crossing Borders: Geographical, Disciplinary, Cultural

日時 : 2013 年 10 月 19 日 16:00~17:30 (発表時間 20 分、質疑応答 10 分)

発表タイトル : The Influence of Continental European Music Theory on English Music Treatises in the Late Sixteenth and Early Seventeenth Century

発表要旨 :

本研究が着目したのは、16 世紀後半から 17 世紀前半のイングランドの音楽理論書におけるヨーロッパ大陸（以下「大陸」）の音楽理論の影響である。本研究は、12 のイングランドの理論書を対象とし、そのなかで引用・言及されている大陸の音楽理論および理論家を網羅的に調査し、オリジナルの大陸の理論書との詳細な比較に基づいて、イングランドの理論書における大陸の音楽理論の影響を考察した。具体的には、過去から同時代までの大陸の理論書・理論家が、当時のイングランドの理論書において、いかなる仕方と言及され、引用されているのか、また、どのような目的と言及・引用されているのか、音楽理論書に限定されない当時の創作原理「模倣 *imitatio*」の概念を導入して、詳しく検討した。結果、イングランドの理論家が引用・言及している大陸の理論家・理論書およびトピック、そして理論家ごとの引用・言及の仕方の傾向が浮き彫りになると同時に、イングランドの音楽理論書は、ヨーロッパ大陸の理論書のなかでも、ドイツの理論書にその記述内容を拠っていることが明らかとなった。

本発表ではまた、先述の「模倣」の概念を説明した。この概念が、イングランドの理論家にどのように捉えられているのかを、モーリー Thomas Morley とバトラー Charles Butler の著作における例を挙げて紹介した上で、同時期に生じつつあった独創性 (originality) という価値概念の問題に言及した。すなわち、本研究で対象とした理論家のうち、モーリーとシンプソン Christopher Simpson は、理論書を書く際に、過去の理論書を模倣する一方で、自らのオリジナリティーを強調していた点を論じた。次に、イングランドの理論書において (1) 原典史料が明示されている記述例と (2) 原典は明示されていないが、大陸の理論書から採られていると考えられる例、の二つを取り上げた。(1) に関しては、当時のイングランドの理論書において最も頻繁に言及されていることが明らかとなったドイツの理論家カルヴィシウスに関し、各理論家 (モーリー、チャンピオン Thomas Campion、バトラー、レイヴェンズクロフト Thomas Ravenscroft) の言及方法、引用個所をまとめ、彼らがカルヴィシウスの著作を用いた目的について述べた。(2) では、1596 年出版の無名著者による『音楽の小道』 (1596) (以下『小道』) について、具体例を示しながら次の点を論じた。まず、『小道』のほぼ全体が、ドイツのベウルシウスとロッシウスの著作からの英訳である

ことを、本研究は明らかにした。だが、『小道』の無名著者は盲目的に元となっている史料から内容を取り入れているのではなく、彼が依拠した史料に書かれている内容と、当時のイングランドで知られていたこととの違いに、折り合いをつけようとしていることがみてとれる。最後に、イングランドの理論書と大陸の音楽理論には、従来考えられていたよりも強い関連があったことが本研究により明らかになった。また、なぜイングランドの理論家たちが大陸の理論書のなかでもドイツの理論書にその内容を拠ったのか、考える理由を述べて、発表のまとめとした。

(3) 「質疑、反響と感想」

質疑応答

発表内容に対し、以下の質問とコメントをいただいた。まずオーディエンスからは、同時期のイングランドの理論書で、独創性（オリジナリティー）を強調する意識がみられたと述べた点に関して、その背景にあるもの、それを生み出した要因は何と考えられるかという質問をいただいた。これに対し、発表者は、本研究で対象とした理論書の一部は、当時の出版事情のために「新しさ」をセールスポイントにする必要があったと考えられることを述べた上で、過去の理論書を「模倣」することから脱却し、オリジナリティーを強調する動きが理論家たちの記述に明らかに見て取れることに言及した。また、より大きな観点からの時代的、思想的背景については今後理解を深めていきたいと応えた。この質問に関連して、別の方から、先の議論は、誰が著者であるのかという **authorship** の問題ではないのか、という的確なコメントをいただいた。このコメントに対しては、この時代は独創性と **authorship** の問題が複雑に絡み合っているが、**authorship** の点から捉え直すことは、きわめて有用であると応え、感謝を述べた。ご専門の近い司会の Denis Collins 先生からは、イングランドの著者たちが、ドイツのカルヴィシウスをこれほど引用していることは意外ながら、面白い発表であったとコメントしていただき、大変ありがたかった。

感想

本学会での発表を通じて改めて感じたことは、自分の発表に対して質問やコメントをしてくれた方に、積極的にこちらから声をかけてお礼を伝えることが、新しい学术交流のきっかけとなることである。今回は、幸いにも司会の Denis Collins 先生のご専門が私の発表内容と近く、セッション直後にご挨拶した際、発表で取り上げたイングランドの理論家について、先生が関わっておられるプロジェクトの最新状況を教えていただくことができた。さらに、後日、メールのやりとりを通じ、紙媒体になった研究成果をお互いに交換させていただいた。

また質疑応答で質問をしてくれた香港大学の大学院生とは、懇親会の場で再会し、議論の続きをすることができ、学会後も交流が続いている。もう一点、英語発表の方法に関して感じたことがある。英語発表の経験が少ないうちは、20分の（標準的な）発表時間のなかで、口頭のみで言いたい内容を伝えることは容易でないように思われる。ノンネイティブの方が発表した際、表や図だけでなく、話の流れがレジюмеやパワーポイントで示されると、より建設的な議論の助けとなっていたように思う。この方法は、これまでヨーロッパ内の国際学会での発表で私自身が実践した際も、多くの場合、好意的に受け入れられたように思う。今回の学会参加で個人的にありがたかったことは、台湾出身のマンチェスター大学博士課程の同期と再会できたことである。さらに、私が発表させていただいたセッション担当の学生スタッフが、この同期の友人であったことは嬉しい驚きだった。最後に、本国際学会での発表に対し資金援助をしてくださった住友生命保険相互会社ならびに日本音楽学会に心からお礼を申し上げる。